



山陽スピリット ニュース No.12

2018(平成30)年9月14日

発行：学校法人 山陽学園 広報・山陽スピリット推進室

タイルに込められたメッセージ

山陽学園短期大学 幼児教育学科
助教 江藤 由香里

新生のみなさんはすでに新しい環境に慣れたところでしょうか。大学院、専攻科、大学、短期大学に通うみなさんの多くは、南校門を通り抜け、四季折々に美しい姿を見せるケヤキの大木を横目に、足早に各教室に向かうのだと思います。さて、この中の何人が、このケヤキに囲まれたD棟の南玄関ポーチ上部外側に英語の詩がはめ込まれていることに気が付いているでしょうか。

1988年4月、当時女子学生のみが通う山陽学園短期大学に国際教養学科という新学科が開設され、入学式を迎えました。新学科への入学者数131名（定員100名）、新設された棟を国際教養学科棟、またはD棟と呼び、棟の内外には国際的教養を育むべく多種多様な芸術作品が設置されました。同年4月10日発行の山陽学園短期大学学報によると、D棟に九つの内外装飾・美術作品が配置されたことが記されています。テラコッタ*タイルで製作された英語の詩はそのうちの一つですが、タイルがはめ込まれた部分をよく見ると、「A message for the 21st century (21世紀へのメッセージ)」とあり、国際教養学科の開設に関わられた方々の想いが詩に詰め込まれているのがわかります。

Dawn comes filled with promise,
we look forward to a world of light.

夜明けは期待に満ちて訪れる

私たちは光の世界を待つ



D棟と英語の詩がはめ込まれている南玄関ポーチ



詩の最初の一部分

国際教養学科棟ということで、詩は英文ではめ込まれていますが、原詩は日本語だったようです。当時、国際教養学科の能登原昭夫教授の案により、詩人でいらした杉本知政事務局長が原詩を書かれました。その詩を英文学がご専門の国際教養学科学科長（国際文化学部開設時の初代学部長）、片山智教授が英訳し、岡山大学の教授でいらした岡本素六氏がテラコッタにされました。

「光の世界」と聞いて、みなさんはいったい何を想像しますか。メッセージを探るべく、発起人でいらっしゃる現山陽学園大学の名誉教授であり、協会の会長でもいらっしゃる能登原先生にインタビューを行いました。

山陽英和女学校の伝統

「学生が英語を話すことができるように」というのが第二代学長の福田稔先生の強い願いだった、と能登原先生は当時のことを振り返って、お話を始められました。

山陽学園の母体となる山陽英和女学校は、1886年(明治19年)、日本組合岡山基督教会に集う人々によって創立されました。校名に見られるように、「キリスト教を道德の基本として、英学をもって高等教育を行う」ということが「設立趣旨」に書かれています。この書を筆したといわれる西山小寿先生は、山陽英和女学校最初の専任教師で神戸英和女学校(現神戸女学院)の一期生でした。オーティス・ケーリ宣教師やアイリーン・マリア・ケーリ夫人も嘱託教師として迎えられ、英語教育に力を注いでいたことが窺われます。また、女学校創立4年目に着任し88歳で亡くなるまで山陽学園に生涯を捧げた上代淑先生も、多くの外国人宣教師が生徒の指導に関わっていた梅花女学校に通い、10歳の時から5年間ほどは週末や休暇時をデフォレスト家で過ごしていました。その後、アメリカで一番古い女子大学として有名なマウント・ホリヨーク大学へ4年間留学し学士を取得しており、英語はお手の物だったようです。淑先生が英語で行ったアメリカ軍岡山駐屯軍中佐への抗議やアメリカ軍兵舎内教会での礼拝説教は有名ですね。

こういった女学校の背景や、国際化という時代背景から、短期大学でも英語を話せる人材を育てたいという熱き想いを、若くしてアメリカのハワイ大学に派遣され、効率よく語学を学べるシステムとして開発された語学演習室(LL演習室)について学んだ実績ある能登原先生に託されたのです。

しかしながら、国際教養学科の開設は「光の世界」への第一歩でしかありませんでした。事実、彼らは新学科を四年制にする計画を立て、学科開設6年後の1994年には山陽学園大学国際文化学部を開学させました。「英語に栄える大学」、これこそが彼らの「光の世界」であったようです。

最後に、21世紀を迎えた今、「光の世界」がどうあるべきかについてお尋ねしたところ、英語だけではなく、新しく開設された学科を含め、山陽学園が世に輝

く(活躍する)ことを望まれるということでした。

岡山英語教育界の「伝説の人」、能登原昭夫先生



余談ですが、私の尊敬する能登原先生は、岡山の英語教育界ではかなり有名です。今では当たり前となっているホームステイ制度を岡山に取り入れ、英語スピーチコンテストライシャワー杯を立ち上げられたのも能登原先生です。光栄なことに、私も先生に教えを受けました。

音声学の講義を受講中にお聞きした先生の数々のエピソードは、私達の刺激となり、私達が世界に羽ばたくきっかけとなりました。留学中の先生が浴衣と下駄でアメリカの町を闊歩された話や、1968年にメキシコで開催されたオリンピックに出席されていた当時の皇太子妃美智子様が体調を崩され、帰国前にお立ち寄りになられたハワイにて、鯉に餌を与えられた際、お相手を務められた経緯や、アメリカへ学生を連れて語学研修中に、マサチューセッツ州にある元駐日大使ライシャワー氏の自宅に招待され、おもてなしを受けられたことなど、話は尽きません。



1970年、ライシャワー邸にて(前列左端が能登原先生)

最近のエピソードとして、82歳の時にアメリカ合衆国に行かれ、オバマ大統領の妹、マヤ様と写真をお撮りになられた話をインタビューの中で聞きました。伝説はまだまだご健在のようです。

* 学報には、terra cottaを英語読みにした「テラカッタ」で記載されています。